火花

私は今〝炭掘る仲間〟を歌いながら職場の片隅で頑張っています

全金属大阪　西沢信正

私は三池闘争の時一週間、全国金属の大阪地方本部を代表してオルグに参加した労仂者です。あの時私は、金属の一支部の活動家に少し毛のはえた程度の労仂者でした。しかし三池闘争が、私を大きくかえてくれました。

労仂者の団結のすばらしさ。闘いの力強さ。三池の仲間たちの、確信に満ちた明るい顔。それらがその後の私を、より積極的な活動家に導き、あれからずっと私を労仂組合の仂き手として、現在まで導いてくれています。

いまでも炭住のおばさんたちや子どもたちの明るい顔、宮川組合長の丸っこい姿が、ありありと浮かんできて、私の部屋につるされているホッパーパイプと〝三池〟と染め抜いたハチマキが、私に勇気を与え、またはげましてくれます。耺場で仕事が苦しい時、モーターやベルトのうなりのなかで大きな声で、〝炭掘る仲間〟と〝頑張ろう〟を歌っています。

あの三池大惨事の時は、怒りにふるえました。

いま私たちの組合も資本の激しい合理化攻撃を受け、労仂者は汗みどろになって仂かされています。多くの仲間が耺場を去り、また会社側へ走り去りました。

それでも労仂者はすばらしいと思います。次から次と、新しい仲間が育ってゆきます。私は必ずそれらの仲間たちに、三池の闘いの経験を話してやることにしています。するとそこから、仲間たちとともに手をとり合って闘う勇気がわいてきます。

三池の仲間のみなさん、どのようにはげしい資本の攻撃を受けても、三池闘争に参加した誇りをもって、耺場の片隅で〝炭掘る仲間〟や〝頑張ろう〟の歌をうたいながら、闘っている多くの仲間のいることを信じてください。

みなさん、ベトナム侵略反対、労仂者の生命と権利を守るために、いつまでもともに手をとって頑張りましょう。

三池の仲間へ

仲間達よ
ひとつの闘いの中で
育った仲間が
ふたつの闘いを
みっつの闘いを
組織してゆく
そのひとつひとつの闘いに
新しい仲間が
集まろうとしている
そのひとつひとつの闘いを
その中で育ってゆく
ひとりひとりの仲間を
しっかりと
結び合わせよう
その力を信じ
その力を大きく
さらに大きくするために
闘ってゆこう

× ×

なお西沢さんの住所は、「大阪市西成区津守町二丁目百四十八番地、全国金属大阪地本、宝鋳工支部」です。

三池にはいま、支部に分会に組合員個人に、あるいは主婦会関係に各方面からこのような、暖かい連帯にもとずく激ましの手紙が届けられています。

またカンパも毎日のように送られており、なかにはわざわざ本部に立ちよって、カンパを寄せていった合化東圧の砂川支部（北海道）の仲間もいます。

詳しいことは、紙面のつごうで略させていただきますが、私たちはこのように、私たちとしっかり結ばれた多くの仲間がいることを常に心の奥に刻みこみながら、いっそうすばらしい組織をつくりあげて、闘ってゆきましょう。

去月26日、ソ連邦共産党機関紙〝プラウダ〟の記者、オフチンニコフさんが三池の闘い取材のためやつてきた。折から来組していたなじみの向坂先生と出会い、ひときわ楽しげだつた。（上の写真）

厚い厚い壁に向け　ぶつかってゆこう

—CO家族

私たちCO家族は、三十八年十一月九日の三川鉱大爆発により、思いもかけぬ廃人同様になった主人や息子を看護し、家を守り、子供を育て、あらゆる苦しみをなめてきました。

そして私たちは、生きるための最低の要求を叫びつづけて、闘いに闘かって、全国の仲間の力強いご支援のおかげで、七月二十一日やっとの思いでCO特別立法を制定することができました。内容的には沢山の問題を残し、三井鉱山との団体交渉で少しでもよくするために、今後しっかりがんばろうと誓い合って、東京を後に山元へ帰ってきました。

ところが三井との団体交渉は、なかなか思うようにすすまず、交渉に入れば決裂と、会社は何とかして、立法を骨抜きにする覚悟で一生懸命なのです。

いよいよ再度の行動がはじまり第一陣として上京し、組合長より労仂省・会社の考えている情勢をくわしく説明してもらい、びっくりしました。私たち家族が抗底座りこみや労仂省前のハンストを決行して勝ち取ったとき聞いた説明内容と、余りにもひどい違いになっているんです。再び上京して、会社幹部や労仂省役人のあのときの態度を思い出すと、ハラの立つことばかりです。

都民の目も、CO問題は七月二十一日の立法制定ですっかりかたずいているものと思っているらしく、私たちがタスキをかけて都内を歩きまわりますと、不審そうにしています。その目の中には、七月の行動のときカンパしてくれたり、私たちとすれ違うときなど、「ご苦労さん」といってくれた人の目があるのです。そのような人たちに対して、どうしても三井の非道さを知らせる必要があると思いました。

CO家族の私たちは、力強い仲間の三本線の団結に守られながら一歩一歩前進しようと思います。厚い厚い壁に向って、ぶっつかろうではありませんか。

被災体験記

今度こそ問おう　三井の殺人責任

三川支部　権藤孜

九月二十八日午前五時三十分ごろ、私は疲れきった身体にムチうちながら、本層三十六卸四片附近を歩いていた。突然、うすい煙が流れてきた。

しまった！　どうする？

「しまった！　ガス・マスクを持ってきていないが、いまから休憩所まで取りに行けばかえってガスのなかで危険にさらされる時間がながくなる。それよりも、一刻も早く上層まで避難せねば……」と心ばかりがせいたが、もともとけい肺の身では坂道の急ぎ足は困難であった。

黒い煙はいよいよ黒くなってきて、やがて足もとさえも見えなくなってきた。のどが痛んだ。眼も痛み、涙がポロポロ落ちた。四年前、同僚たちがあのガスのなかでもがきながら倒れていった姿が、一瞬頭のなかをかすめた。

「なにくそ。殺されてたまるか」、と歯をくいしばり、ようようにして煙の中を突き進んだ。思えば四年前の爆発のときには、係員が「残業してくれ」と強要したのを、私は「今日は耺場常会の日だから、絶対残業はしない」と振り切って昇ったものだった。そのためわずか数分の差のおかげで、私は助かったが、そのとき係員のいうままに残業していたら、私はその係員のように殺されていたに相違ない。

早よう昇るごつせんか！

約三十分間の苦闘の末、やっと宮浦鉱からきれいな空気が流れてくる上層三十六昇材料係にたどりついた。このときの空気の美味しかったことを、私は生涯忘れることはないだろう。時まさに六時十分だったが。

私たちは、当然ながら係員に状況の説明を求めた。係員によれば電話で知りえた限りでは、O片付近の自然発火らしい、ということだった。自然発火だとすれば、ちょっとやそっとの時間では火は消えない。私たちは係員に要求した。

私たち「すぐ宮浦から昇ったらどうか」

係員「上司の指示がないから駄目だ」

私たち「現在の状況を話して、上の方へ要請したらいいではないか」

係員「もう一度電話要請する」

そういって係員は電話にいったが、私たちの要求は無視してただ「現在、坑内仮診療所付近に開発関係××名が待避しています」などと告げるだけで、「早く宮浦からの昇坑したら」との意見は何一つ話してくれない。そして私たちに向っていった——

係員「上からの連絡では、いま救助隊が下だって発火場所を密閉しているから注水すれば煙も消える。そしたらすぐ三百五十メートル坑道を通って昇る」と伝えた。時は六時半ごろだったと思う。

私たち「密閉作業だって？　そんなことだったら、今日中には終らんめだい。ガス吸った者もいるんじゃけん、早う宮浦から昇るごつせんな」

係員「上司の指示がないから駄目です」。それにしてもとにかく上層三十六昇五メ貫まで昇ることにしよう、ということで五メ貫まで昇ることになった。

三時間半後にやっと指示

五メ貫に着いた。それからまた僅かではあるが少しばかり下りて三片捲立で待機した。「ここから宮浦人車線までは歩いて十分くらいで行けるのに、なぜここに罐詰にするのだろう。きっといま宮浦へ行けば、一番方、常一番の入坑とかちあうので生産に障害をきたすからだ」。私はつくづく三井の生産第一主義の正体をここに見た思いがした。

罐詰にされて三時間半。その間私たちのごうごうたる非難の声をあびてか、係員からやっと宮浦への昇坑の指示があった。

宮浦へ行くには、宮浦連絡斜坑という四十五度の急傾斜の坑道を通らねばならない。ところがこの斜坑が、危険きわまりないものであった。梯子階段もない上に、大きなボタが上の方からごろごろ落ちてくる。そのため後続の人々には、とても危なくて思うように上がれない。私たちのためには唯一の命の道というのに、こんなところにも保安無視の三井の姿があった。

命だけは助かったが……

私は昇坑しさえすれば、恐ろしいガスの中を通ってきたのだから、せめて簡単な検診ぐらいはあるものだとばかり思った。だが、医者らしい人影もなし、「気分の悪い人はいないか」と聞くのではなし、パンと牛乳を与えただけでバスに乗せられた。多分ここから天領本院へ行って、そこで検診するのだろうと思っていたら、バスはそのまま三川鉱へ来た。三川鉱へ着いたら、係員の「着到を行ない、安全灯を返し、入浴したら帰ってください」といっただけで、まるでやっと生きのびた私たちを追いたてるようにして、帰してしまったのである。

やっぱり組合

私たちは三川支部へ立ち寄ってそこではじめて検診の指示を受け大地評診療所で受診したところ、私はただちに入院となった。

あとで聞いたところによれば、三井は「自然発火だから、会社に落度はなかった」とPRに必死だったという。たとえ自然発火しても、すくなくとも四、五日前から異常高温などの状態は発生しているはずで、点検を密にしてさえいれば前もってちゃんとわかっているはずだ。三井が如何に保安を無視しているか、弁明のしようはないはずだ。

ガス患者にされてしまった私たちを坑内に三時間半以上も監禁し、また昇坑後も何の検診も行なわずしておいて、対外的には「昇坑者は全員綿密な健康診断を行ない、重症、軽症に分け、重症者は直ちに救急車で本院へ送った」と世間をあざむく発表をするに至っては、激しい憤怒を感ぜずにはいられない。

こんどこそ三井の幹部連を、殺人傷害罪で責任を問わなければならない。

これがわれわれの中から、三度びCO患者を出さないための闘いでもあるのだ。

（病床にて記す）

花園さん、浦本さん　職場へ復帰

かねて福岡県総評の総務局長として仂いてきた花園憲一さんは、去る定期総会を機に退任、九月から耺場に復帰、宮浦鉱の坑内機械で仂いている。

花園さんは昭和三十二年以降、九炭労の役員を経て県総評にはいったあと、こんどの退任となったもので、こんどは耺場の仲間とともに反合理化闘争の先頭にたって闘う決意を固めている。

また、過去ながいあいだ大地評の事務局長の任務をつづけてきた浦本由男さんは、さきの大会を機にその任務から退き、本所の土建課に耺場復帰した。